

1: 【The Black Note】第5話 運命の歯車

2:

3: ■オープニング

4: セレスモノローグ「後の世に、闇の書・ブラックノートと呼ばれた書物がある。それは、12の
5: 精霊核の伝説の裏に隠された歴史を書き記した漆黒の表紙の書物だった。決して歴史の表
6: に晒されることのなかった哀しくて、切なくて、心がおしつぶされてしまいそうなほどの
7: 真相。それは飾られた偽りではなく、紛れもない真実——」

8:

9: ■タイトルコール

10: デュレ「The Black Note 第5話 運命の歯車」

11:

12: ■本編

13: SE：きゅいいと戸の開く音

14:

15: デュレ「——わたしのセレスをどうするつもりですか？」

16: 久須那「ダークエルフ……、お前は何者だ？」

17: デュレ「デュレと申します。お目にかかれて光栄です」

18: シリア「お前はサムとどこか他に行ったんじゃないのか？」

19: デュレ「行って来ましたよ。けど、そんなのは後です。……今は——久須那さんとの腕試しが先。

20: 選手交代。よろしいですか？」

21: 久須那「……わたしは構わないが、セレスのプライドが許すのか？」

22: セレス「このごまであたしに何が出来るってさっ」

23: 久須那「じゃあ、シリアはどうだ？」

24: シリア「オレは目的が果たせるのなら、それで構わない」

25: 久須那「そうか？ ふむ、まあいいだろう。そのかわり、手加減はなしだ」

26: デュレ「ええ、もちろんです」

27:

28: SE：小さな物音

29:

30: デュレ（……勝たなくてもいい。勝つ必要はない。けど、チャンスは多くない——）

31:

32: 久須那「どうした？ デュレ。こないのか」

33: デュレ「深淵なる闇の支配者シルト、我が呼び声に応えよ」

34: （大きく深呼吸）

35:

36: SE：魔法陣が発動されるような音。

37:

38: デュレ「我が名はデュレ。闇の力を操るものなり。闇は邪にあらず。追憶の片鱗に住まう孤独の

39: 想い。そを打ち砕き、いずる力を我に与え、我が心の声を聞き届けたまえ。刹那の閃き、

40: 深淵、漆黒の闇をかの世界に呼び覚ませ」

41:

42: SE：消える音

43:

44: デュレ「パニッシュ・アイ」

45: 久須那「お前は闇に身を沈めることもできるのか。……流石、ダークエルフと言うべきだろうが、

46: その程度のことでわたしを惑わすことはできない」

47: デュレ「ええ、そうですね。ですから、まだ、続きがあります」

48: 久須那「なるほど」

49:

50: SE：闇護符を出す音。

51:

52: デュレ「アルティメイト・スピアっ！ キャリアアウト」

53: 久須那「……スベル・シールド」

54:

55: SE：アルティメイト・スピアの発動。シールド発動。

56: SE：床の削れるような音。等々。

57:

58: セレス「うわっ！ もう、無茶苦茶！ 天井が崩れ落ちるって。滅茶苦茶しないでよ！」

59: デュレ「これくらいしないと久須那さんと渡り合えません。——これなら、どうですか！ ダー

60: クネスフレイム！」

61: 久須那「大したことはないな……。ボムフレイム！」

62: デュレ「フォワードスベル。ピンポイント」

63: セレス「ちょ、ちょっと、デュレっ！ どこに飛ばしてるのさっ！ あちっ、熱いって！」

64:

65: SE：炎の飛び散る音

66:

67: 久須那「……なるほど。オールマイティに何でもこなすか……。そろそろ、終わりにするか？」

68: デュレ「終わりではよらしいんですね？」

69: セレス「あっ！ デュレ！」

70: 久須那「気を抜くこうなるっ！」

71:

72: SE：デュレの手首を握る音。（ぎゅ）

73: SE：身体が回される音と、床に背中を打ち付ける音。

74:

75: デュレ「あぐっ！ ……げほっ、うう……げほげほっ」

76: セレス「あちゃ〜。——あたしと同じような手でどうしてやられちゃうかなあ、キミは……」

77: サム「セレスには勝ってもらいますとか何とか言っていたのに、案外たいしたことないな」

78: デュレ「余計なお世話です！」

79: 久須那「……まあ、いいだろう……」

80: シリア「——いいのか？ 久須那」

81: 久須那「ああ。真の勇気を持つものだけが封印の鍵を手に行ける」

82: パッシュ「真の勇気が持つものだけが封印の鍵を手に行ける……か。が、こうも簡単にやられる

83: 連中でダイジョーブなのか？ もっと、骨のある奴もいたかと思うが？」

84: 久須那「強いと越したことはないが、強ければいいというものでもないさ」

85: パッシュ「そういうものなのかな？」

86: シリア「久須那が二人を認めるなら、オレが言う事はないさ……」

87: セレス「それはどうも。でも、それはそうと、早く、着替えさせてくれないかな？」

88: シリア「ちょっと待て」

89: セレス「ちょっとも待てない。見てよ、これ！ 服はボロボロ真っ黒だわ。髪はぐちゃぐちゃよ」

90: シリア「——後でパッシュの服でももらえ。ついでに風呂も貸してもらえよ……」

91: パッシュ「そうだなあ。じゃあ、とりあえず、わたしのうちにくるか……。この子たちをサムに

92: 預けるのは危険極まりないだろうしな」

08.06.17
TBN05.rtf

93: サム「おいおい、てめえは俺を信用できねえと言うつもりか？」
94: パッシュ「ああ、可愛い女の子についてはよりいっそう」
95: サム「いや、向こうで久須那が激しく睨んでるからそおいう冗談を言うのやめてくれない？」
96: パッシュ「嘘は言ってない。じゃ、殺されないように気をつけるんだぞ。サム」
97:
98: SE：近づく足音
99: SE：肩を叩く音
100:
101: サム「そりゃねえぜ。久須那を怒らせると手えつけられないんだからよお——」
102: パッシュ「デュレ、セレス、シリア。そんな女の敵っ、はほっといていいから、いらっしやい」
103: シリア「……すまん、サム。オレも誘われたから♪」
104: サム「——。この薄情者！」
105: ちゃっきー「へいっ！ 旦那しやま、大丈夫だじえい。まだ、おいらがいるでさあ。おいらは例
106: え火の中、水の中。女たらしの味方だじえ？」
107: 久須那「……お前はうるさい」
108:
109: SE：ちゃっきー。燃える
110:
111: ちゃっきー「うお。あちや、あちち〜」
112: 久須那「……さて、サム——。さっきデュレと何をしてきたか一字一句漏らさず説明してもらお
113: うか？」
114:
115:
116: //場面転換・パッシュの家……。
117:
118: シリア「……こおいうやり方をしたやつは初めてだったな——」
119: パッシュ「よく言えば戦略的——ずる賢い……と言えば、そうとも思わない」
120: デュレ「——あのですね。天使相手に正攻法でやってたら、勝ち目なんかありませんっ！」
121: セレス「へ〜へ。すみませんね。ど〜せ、あたしに戦略なんてありませんよ〜だ」
122: デュレ「だからっ！ 何度やっても久須那さんに勝てないんです。少しは精進しなさい！」
123: セレス「へ〜い……。けどさ、きれ〜に負けた癖にデュレったら口先だけは達者なんだから、や
124: になっちゃうよね」
125: デュレ「何か、言いましたか？ お姉さま？」
126: セレス「い？ いいえ、特に……」
127: デュレ「よろしい。ところで、リボンちゃん。さっき、テレネンセスの教会跡に行ったときに
128: ……こんな走り書きを見付けました」
129:
130: SE：デュレ、紙切れを取り出し、かざした。
131:
132: デュレ「——セレスへ、1292年5月24日。地下墓地大回廊にて待つ……」
133: セレス「ちょっと貸して。何で、こんなところであたしの名前が出てくるの？」
134: デュレ「……赤の他人かもしれませんが……。そっちの方が確率は低そうです」
135: セレス「……この筆跡、見覚えがある。でも、だって、そんなはずない。どう考えたってそんな
136: ワケないよ。——、けど、父さんの字、これ……」
137: デュレ「セレスのお父さん・アルタさんの字？」
138: セレス「……本当は生きてる？ 死んだんじゃない？」

08.06.17
TBN05.rtf

139: デュレ「それは判りません。ただ、何かがおかしいんです——。千三百年も前に廃虚になった教
140: 会に不自然に真新しい紙切れ——。それがセレス宛のメッセージだなんて出来すぎてます」
141: セレス「は〜ん、でも、気にしてもしょうがないよ、真相が判るまでは。けどお……」
142: デュレ「何ですかっ！」
143: セレス「サムっちさ。全然、来ないんだけど。……もしかして、やられちゃった？ けちよんけ
144: ちよんけ？」
145: シリア「やられたかもしれないな？ ここまで来ないところを見ると」
146: パッシュ「ま、今にポロポロにされてやって来るだろうが、いつものことだ。気にするな」
147:
148: SE：足音
149: SE：タオルのファサと言う音。
150:
151: パッシュ「とりあえず、風呂にでも入ってこい。……二人ともひどい格好だぞ。デュレもセレス
152: も真っ黒だ。服は籠に入れておけ、洗濯しておくよ。それまで、あたしの服、貸してやる
153: から着てろ」
154: シリア「……風呂はそっちの廊下の突き当たりだ」
155: セレス「あはは♪ シリアくんさあ、詳しいね。お二人はどういう関係？」
156: シリア「あ？」
157: パッシュ「——居候。シリアはあたしの居候だ。久須那との腕試しの時に懐かれてしまったな。
158: そのまま、ずるずると、こいつは遠慮なくいつて、しかも、だんだん凶々しくなる。な、
159: リボンちゃん♪」
160: シリア「リ？ リボンちゃん？」
161: セレス「あは♪ 細かいことは気にしなさんなって。それより、パッシュも久須那との腕試しを
162: やってんだ。しかも、リボンちゃんに懐かれるってことは……いいとこまで行った二人
163: か三人？ さらに、きっとパッシュはリボンちゃんの好みだった。絶対そ〜だっ！」
164: デュレ「……逆もまた真なり。ではないでしょうか？ 嫌いな精霊をそばには置いておかないで
165: しょ」
166: セレス「え？ 何？ ひょっとして、パッシュとリボンちゃんって相思相愛だったの？ ええ？
167: もしかして、あたしってリボンちゃんの子供なのお？ じゃ、何？ 父さんは父さんじゃ
168: なくて、あたしはハーフエルフかいっ！ しかも、フェンリルとのハーフ？」
169: パッシュ「何、訳の判らないことをわめいてるんだ？」
170: セレス「え〜っ、だって、ショック……むぐっ、デュレ、何すんのさ、むうう」
171: デュレ「喋りすぎなんです。ショックだからってそんなにべらべら、……サムやリボンちゃんみ
172: たいに喋りまくられたら、冗談じゃない。それにそれは思考が飛躍しすぎてますっ！」
173: セレス「でも、リボンちゃんなら、父さんでもいいかなって思ったりして」
174:
175: SE：タオルの降ってくる音
176:
177: パッシュ「さっさと風呂に入っこい。話はそれからだ」
178: セレス「は〜い、はい。ちゃっちゃと入っこあがってきます。デュレ、行こっ！」
179:
180: SE：腕を掴む音。
181: SE：どたどた足音。
182:
183: デュレ「ちょっと、セレス。何であなたはそう、乱暴なのかしら」
184: セレス「細かいことは気にしな〜い♪ さあさ、お風呂、シャワー♪ さっぱりしましょ」

185: バッシュ「楽しそうだな。あの様子だと、当分、出てきそうにもないから、あたしたちはちょっとだけ休ませてもらおうか？ それとも、ベッドでごろごろ、遊ぼうか♪」
186: シリア「なあ、バッシュ」
187: バッシュ「何だ？」
188: シリア「……オレは何だかホントのことを言うのが辛くなってきたよ……」
189: バッシュ「——シリアが……。セレスの父親だってことか？」
190: シリア「違う！」
191: バッシュ「……本気にするな。……それとも……封印は解けないかもしれないということか？」
192: シリア「——やはり、バッシュは気付いていたか。最高位の光の魔法。シェイラル司祭が亡くなった今、封印を解ける確率はほとんどない」
193: バッシュ「が、わたしは知ってるぞ。魔法を解かずに、破壊し、絵に封じられたものを呼び覚ます闇の魔法があることを」
194: シリア「そうだ……。いつから知ってた？」
195: バッシュ「もう、何十年も前からだ。その魔法を使えるようになりそうな奴を捜していたんだろう？ そうでなければ、こんなに長い間、捜し続けることはなかったはず」
196: シリア「そう、……光の封印魔法を破壊する闇の魔法がある。そいつを使えば、誰も犠牲を出さずに久須那を伝説の向こうから呼び覚ますことができる」
197: バッシュ「はず、だろ？ 封印破壊の魔法は“解く”より遙かに危険だ。大丈夫なのか？」
198: シリア「——善良なる闇の精霊と契約できたら、その危険はある程度緩和できる。……それとも、そんなことを言うのは親心なのか？ オレには判る……。セレスは——」
199: バッシュ「……セレスがあたしの娘ということか」
200: SE：リボンの鼻先を突っついた。
201: シリア「そうだ——」
202: バッシュ「金髪碧眼。持ってる空気。仕草。あたしと同じウエストポーチをつけてる。ちょっと傷んでるけど、あれはセレスの五歳の誕生日にプレゼントしたものだ……。大きくなったな——」
203: シリア「エルフとしてはまだまだガキだぜ？」
204: バッシュ「けど、あたしにしてみたらずいぶん大きくなったもんだと思うんだ？ 六歳の時だ。アルタがあたしの前からセレスを連れ去ったのは。……ふふ。それにしてもあの娘も弓使いになったんだ。あたしの娘だね」
205: セレス「バッシュ。バッシュ？ リボンちゃん？ どこに行ったのさ？」
206: デュレ「セレス、だから、そんなに大声出さなくたって聞こえますって」
207: シリア「騒々しいのが呼んでるぜ？ 行くか？」
208: バッシュ「……デュレも十分、うるさいと思うんだが……。気のせいかな？」
209: シリア「満更、気のせいでもないオレは思うぞ」
210: バッシュ「だよな。やれやれ、あれがあたしの娘とその相棒と思うと複雑な気持ちだな」
211: シリア「が、楽しそうに嬉しそうに見えるけどな。オレには。——セレスには言うのか？」
212: バッシュ「……セレスは気がついてるだろ？ だったら、言う必要もないさ」
213: SE：首を横に振る。
214: シリア「ああ。セレスはお前に似て勤がいいようだ。だが、あいつは切り出してこないだろう」
215: バッシュ「だろうな。ただ……。言う必要もないよ。伝えなくとも、あの娘はあたしの娘」
216: シリア「不必要な情報はいらぬ混乱を招くと……？」

217: バッシュ「もう十分すぎるくらい混乱してると思うけどな」
218: SE：首を横に振る。
219: バッシュ「ただ、アルタは時を超える秘術を見つけたんだと言っていたのを覚えていて。それがホントなら、あの娘たちはあたしたちの時の流れの中にはいない。だとしたら、干渉しすぎるのも良くないかなってさ」
220: シリア「そうだな。……それはそれと背中をそんなになで回すのはやめてもらえないか？ 背中だけ毛が抜けたらかっこわるい」
221: バッシュ「そうか？ もう、十分抜けてるじゃないか。あたしのベッドはお前の毛でいっぱいだ」
222: シリア「え？ え？ そんなに抜けてるか？ どこかはげてるか？」
223: バッシュ「何、慌ててる？」
224: シリア「か、からかったな。ひどいぞ、バッシュ」
225: バッシュ「あははっ♪ いつも同じ手に引っかかるお前が可愛いよ。抱き締めてやる」
226: SE：首筋にぎゅ。
227: バッシュ「その暖かい毛皮、あたしも欲しいって何度思っただろう……。——なあ、シリア。……あたしはセレスの時代に生きてるんだろうか……」
228: シリア「藪から棒にどうした？」
229: SE：バッシュの腕の中でごそごそ。
230: バッシュ「あの娘。いろいろ知ってる口振りだったからな。アルタはセレスと共に未来へ行ったと考えるのが妥当かなと思って。そしたらな。あの娘の驚いた顔。顔は知ってこそいれ、本物のあたしを見たことがないんだと思ったよ」
231: シリア「考えすぎだ」
232: バッシュ「だったら、いいな。それに懸念はそれだけじゃない。さっき、デュレが何か言ってた？ ……5月24日。地下墓地大回廊で待つ。だったか？ アルタは何を狙っている」
233: シリア「仮にも旦那だろ？ そんなこと言っていないのか」
234: バッシュ「もう、三百年も会ってないよ。……アルタはセレスに何をやらせたい？」
235: セレス「ねえっ！ ちょっと、バッシュ。いつまで待たせるつもり？」
236: デュレ「大人しくしなさいっ！ 騒音公害をまき散らさない。全く、鐘の音じゃあるまいし」
237: セレス「あたしの声は鐘と同じかいっ！」
238: デュレ「その音量が鐘と同じだって言ってるんです」
239: シリア「……そろそろ行った方がいいんじゃないか？ セレスの不満が爆発するぞっ」
240: バッシュ「そうだな。……今はお前がいてくれるだけでいいんだ。ほらほら、うるさいぞ。いい加減に黙れ！」
241: セレス「あっ！ バッシュ。どうせすぐには出てこないと思ってたんでしょけど。幾ら何でも待たせすぎだっ」
242: バッシュ「……つまり、何か食わせろってことか？」
243: セレス「だって、……この街に来てから何も食べてない……」
244: バッシュ「う～ん。急にお客が来るとは思ってなかったからな。……昨日の残り物でいいか？」
245: セレス「うう……。食べ物だったら何でもいいですう」
246: バッシュ「ははっ。じゃ、少し待ってる。温めなおしてやるから、テーブルで大人しくしてな」
247:

277: SE：トトと歩く音
278:
279: バッシュ「シリア。嫌なことはさっさと済ませてしまえ」
280: シリア「ああ」
281: デュレ「嫌なことって何ですか？」
282: シリア「……デュレには二つの魔法を覚えてもらう」
283: デュレ「二つの魔法？ 封印を解く魔法だけじゃないのですか？」
284: シリア「それと封印破壊の闇の魔法だ」
285: デュレ「禁断の闇魔法、封印破壊ですね。どんな高名な魔法使いでさえ、使いたがらない。光の
286: 魔法で封印が解けるならどうしてそんな危険な魔法を……？」
287: シリア「その訳は……シェイラル司祭がこの世にいないからさ」
288: デュレ「つまり、術者がいないと解けないほど強力な魔法だと……？」
289: シリア「そうだな。光の封印魔法は元々、魔を封じるためのものだ。殺せないなら、絵やその他
290: の物体に閉じこめてしまえばいいと言うのが発想の基本にある。だから、そう易々と解け
291: ないし、解けては困る」
292: セレス「では、封印は解くのではなく、壊すしかないということですか？」
293: シリア「そういう訳でもないんだけどな。……可能性はとても低いけど、本人の直系子孫が生きて
294: いれば何とかなるかもしれないと言うレベルだ」
295: デュレ「では、いいですか？ 今、シェイラル司祭の一族ってどこに何人くらい居るんですか？」
296: シリア「……アルケミスタに一人だけ、おばあさんだよ」
297: デュレ「一人だけのおばあさん……。——けど、そのアルケミスタのおばあさんにも会ってみたい
298: い……。もしかしたら、伝説の一端を知れるかもしれない」
299: シリア「まあ、どちらにしてもアルケミスタまで行か。闇の魔法も、光の魔法もそこにしか教
300: えられるだけの技量を持ったのがいないからな」
301: デュレ「しかし……。封印破壊ですか……。覚えるのはいいんですが、封印破壊魔法はわたしの
302: 得意な聖なる闇じゃない……」
303: シリア「ああ、邪なる闇魔法だ」
304: セレス「何、それ？」
305: デュレ「闇の魔法には聖と邪の二つに大別されます。一般に闇魔法という時は聖の方ですね。聖
306: の方は術者に危険は及びませんが、パワーに欠けます。邪の方は口クでもない魔法ばかり
307: ですが、同系の聖なる闇魔法と比べると破壊力が桁外れです。ただ、闇の裏側が術者の存
308: 在を奪おうとするんですけどね……」
309: セレス「はぁん？」
310: シリア「ま、セレスにゃ、どうでもいいことか。弓を持ってデュレをしっかり守ってくれたら、
311: それで万事オーケーだ。こういう時、凄腕の弓使いが居ると頼もしいよな♪」
312: デュレ「お転婆、お間抜け、適当娘でよろしければ……ねっ」
313: セレス「ねっ。じゃないやいっ。どうして、デュレはそやってことある度にあたしを虐めるん？」
314: デュレ「虐めてませんよ。わたしはホントのことを言っただけです」
315: シリア「……緊張感がないな。……久須那との時といい今といい。身の程知らずなのか。それと
316: も、底知れぬ実力の持ち主なのか……」
317: セレス「それで、しくじったらどうなるん？」
318: シリア「いい方と悪い方、どちらから聞きたい？」
319: セレス「その口ぶりからして、どっちも良くなさそうじゃん？」
320: シリア「まあ、そう言うな。……良くて闇の住人。運がよけりゃそれでも帰ってこれるさ。悪け
321: りゃ、闇の領域と現世の狭間を永遠に彷徨うことになる。実例もあるから信憑性が高いぞ」
322: セレス「そんなのに信憑性があったって嬉しくない」

323: バッシュ「シリア、話は終わったか？ 食事にするぞ。——うん……？ 席がいっぱいだなシリ
324: アは床で食うか？」
325: シリア「な？ オレに床で食えっていうのか？ 犬ころじゃないぞ。おま、天下の精霊王さまに
326: 向かって何ちゅう言いぐさだ」
327: バッシュ「お前がそんなことを言っても似合わないよ」
328:
329: SE：シリアの鼻先をばちん
330: SE：セレス、どたどた
331:
332: セレス「リ、リボンちゃんはあたしのもん！ バッシュになんか絶対あげないっ」
333: バッシュ「お？ 何だ？ シリアはあたしのもんだ！」
334:
335: SE：シリアを引っ張り合う音？
336:
337: シリア「ちょっと待て、お前ら。オレは綱じゃないぞ。バッシュ、首。首が絞まる！ ——セレ
338: ス、カ一杯ひっぱるな！ 千切れるって、尻尾。放せ〜っ！」
339: セレス「絶対放すもんか！ リボンちゃんは誰にも渡さないんだからっ」
340: シリア「デュ、デュレ？ ちょっ、助けて？」
341: バッシュ「デュレは関係ない。あたしとセレスの問題だ。あたしだって、シリアを放すつもりは
342: ない。大体な、そもそもシリアはあたしのもんだ。後から来たセレスにどうしてやらな
343: きゃならんのだ」
344:
345: SE：火花ばちばち
346:
347: シリア「オレの権利はどうだっていいってのか？」
348: セレス「後先なんて関係ないもんっ！ あたし、リボンちゃんが好き！ だから、あげないっ」
349: デュレ「……ねえ、折角のシチュー、冷めちゃうんだけど——先にごちそうになってもいいかし
350: ら？」
351:
352: //朝
353: SE：鳥の鳴き声
354: SE：勢いよくドアを開ける音
355:
356: バッシュ「ほら、お前ら、いつまで寝てるつもりだ？ 起きろ」
357: セレス「(あくび) だあって、昨日、寝たの、明け方近くだったから、まだ眠くて」
358:
359: SE：ごそごそ、もぞもぞ。
360:
361: バッシュ「問答無用！。……朝飯を食わなくてもいいなら、好きなだけ寝てもいいぞ」
362: デュレ「あ、わたしは起きますよ。昨日のセレスみたいにお腹がぎゅるるう〜、なんて恥ずかし
363: くて」
364: セレス「あたしだってヤダ。食べに行くから待っててよ！」
365: バッシュ「じゃ、さっさと着替えて来な」
366:
367: SE：階段を下りる
368:

369: デュレ 「……流石、セレスのお母さんですね。性格までそっくり」
370: セレス 「余計なお世話さん」
371:
372: SE: ベッドから起きて、階段おる
373:
374: シリア 「お？ やっと起きたか。寝坊助どもが」
375: セレス 「おはよ。リボンちゃん。今日も毛並みがつつやだね。ただし、尻尾は除く」
376: シリア 「気にしてることをさりとて言うなっ！」
377: セレス 「あははあ。やっぱり、気にしてたんだ♪」
378: パッシュ 「……ぐちゃぐちゃいてないで、さっさと飯を食え！ 食ったらすぐに出掛けるんじゃ
379: なかったのか？ シリア」
380:
381: SE: ドアが開く
382:
383: サム 「——何だ、何だ、朝っぱらから騒々しいな」
384: セレス 「あ、サムっち。生きてたんだ♪」
385: サム 「死にはしなかったな。とりあえず。ははは……」
386: セレス 「あ〜。相当まずかったんだねえ」
387: パッシュ 「……よく、生きていたな。サム。口八丁で切り抜けたか？」
388: サム 「あ？ 俺さまを捕まえて何を言うか。俺ほど裏表のない人間など……」
389: ちゃっきー 「嘘〜」
390:
391: SE: ちゃっきー登場
392:
393: ちゃっきー 「てめえほど、裏表のある人はいねえぜえ！ 女の前じゃあ、ナイスガイ。男の前
394: じゃあミスタークソ野郎。そして、そして、愛しの久須那っちの御前じゃあ、ただの借り
395: てきたにゃんこ。それでいて、どこのどいつが裏表のないせーかくだってえ？ 聞き捨て
396: ならねえ」
397: サム 「……とりあえず、てめえは黙れ」
398:
399: SE: 握る音。
400:
401: ちゃっきー 「きゃ〜、ひっど〜いい。おいらのビポーが台無しになったらどうするう！」
402: サム 「ならねえから安心しておけ」
403:
404: SE: 捨てて、踏みつけ。
405:
406: シリア 「あーもう、うるさいぞ。いつまでも騒いでいないで、さっさと食え！ 時間は一秒たり
407: とも待ってくれないんだぞ！」
408: セレス 「怒らない、怒らない。怒ると血圧が上がるよ？」
409: シリア 「……ふざけるな」
410: デュレ 「セレス、真剣なリボンちゃんを挑発すると、本気で冥界送りにされますよ」
411: セレス 「はん？ 心配してないもん。そんな時はデュレが助けてくれるんでしょ？」
412: デュレ 「知りません！。リボンちゃんの魔法なんてわたしでは防ぎようがありません」
413: セレス 「あら、案外、素直に認めたのね——」
414: デュレ 「自分の実力を過大評価するのは良くありません。身の程をわきまえないと……いくら命

415: があっても足りません」
416: パッシュ 「——いっそのこと死んでしまった方がその無鉄砲さも直っていいんじゃないか？」
417:
418: SE: テーブルに皿を置く音
419:
420: セレス 「あっ、ひどいんだ、みんなしてさ。こんな性格美人を捕まえて、虐めるんよ？」
421: デュレ 「虐めてません。そもそも誰が性格美人なんですか？」
422: セレス 「少なくともデュレじゃないことだけは確かよね」
423: デュレ 「……セレス？ リボンちゃんにやられる前にわたしが張り倒してあげましょうか？」
424: パッシュ 「……お前ら、少しは静かにしろ！」
425:
426: SE: げんこつ
427:
428: セレス 「いったあ〜い。何もぶたなくなつて……」
429: デュレ 「どうしてわたしまで……」
430: サム 「……ところで、俺の朝飯は？」
431: パッシュ 「何で、お前の分を用意してなきゃならんのだ？ 自分ちで食えっ。まあ、腹べこで半
432: 日過ごすのも可哀想だしな。トーストと珈琲だけでいいなら、いいぞ？」
433: サム 「それだけでも十分だ。恩に着るよ、パッシュ」
434: パッシュ 「……これで貸し二つだぞ。何かあったら、支払い、よろしく頼むな」
435:
436: SE: 足音、キッチンへ
437:
438: //アルケミスタへ
439: SE: ひょおおおおおお。風の音。
440: SE: 足音。何か、家のありそうな効果音。
441:
442: デュレ 「アルケミスタ？ シメオンに比べたら小さな町ですね……」
443: シリア 「まあ、そうだろうな。……しかし、ここは住みよい町だよ。そして、お前に会わせたい
444: シェイラルー族の最後の生き残りもこの町のこの場所にいる」
445: デュレ 「ここに……」
446: シリア 「——どうした、早く行け。……心配するな、オレとシェラは古い知り合いだよ」
447:
448: SE: ノックする。
449:
450: レイア 「……どなたですか……？」
451: デュレ 「……。シメオンから来たデュレです。シェラさんに……」
452: レイア 「シェラさんは誰ともお会いになりません」
453: シリア 「——オレと一緒にいてもダメなのか？」
454: レイア 「シリア？ 久須那のシルエットスキルに認められたヤツがいるのか……？」
455: デュレ 「はい。デュレといいます」
456: レイア 「ほー。——では、こちらへ……」
457:
458: SE: 足音。
459: SE: 揺り椅子の揺れる音
460:

461: シェラ「その気配はシリアですね——」
462: シリア「ああ、そうだよ」
463: シェラ「……他にもお友達を連れてきたようですけれど、そちらの方々はどうなですか……？」
464: シリア「久須那の腕試しに初合格した、エルフのデュレとセレスだ」
465: デュレ「初めまして」
466: セレス「初めまして、おばあちゃん」
467: シリア「シェラ。ここまで言ったら、オレたちがここに来たワケ、判るよな？」
468: シェラ「ええ、判りますよ。……とうとう、わたしたち一族の使命を果たすときが来たようです
469: ね。——レイア、こちらに……」
470: レイア「はい」
471: シェラ「レイアがデュレ、あなたに久須那の封印を解く光の魔法と、封印そのものを破壊する間
472: の魔法を教授します」
473: デュレ「よ、よろしくをお願いします」
474: レイア「はい。よろしくをお願いします。では、一言一句間違いなく呪文を詠唱できるようにみっ
475: ちり修業するから、しっかり覚悟をしておけ。」
476: デュレ「いえ、あの、その前に、どうしても知りたいことが一つだけあるんですけど」
477: レイア「何だ？」
478:
479: (胸騒ぎのするようなイメージで、雰囲気が変わる)
480:
481: デュレ「——マリスと言う方をご存知ですか……？」
482: シリア「どうして、その名を知っている？」
483: サム「何故、てめえが知ってるんだ？」
484: デュレ(驚いて)「いえ、あの、そのお。どう説明したらいいかよく判らないんですけど、今朝
485: 方？ くらいから、この名前が頭から離れないんです。特にどこかで聞いたような覚えも
486: ないんですけど、ただ何となく、今、尋ねた方がいいような気がして」
487: シェラ「言っても構わないでしょう？ 久須那の封印を解く“鍵”を手に入れようとすることは恐
488: れ早かれ、マリスと対峙することになるでしょうから……」
489: シリア「……そうだな……。あとでごちゃごちゃになるよりは先に知っておいたほうがいいかも
490: しれない。——お前の言うマリスはおそらく——黒翼の、災いを呼ぶ天使」
491: デュレ「黒翼の災いを呼ぶ天使」
492: シリア「ああ。マリスは氷の中に深く封印されているが、久須那に認められそう連中はマリス
493: の存在をそこはかとなく感じるようだ。ただ……、お前みたいに名前まで言い当てたのは
494: 初めてだけだな」
495: デュレ「では、久須那さんとマリスとは何か、関係があるんですね？」
496: シリア「関係があるというか、因縁があるというか……。行き違いがあったというか」
497: セレス「勿体ぶらずにスパッと喋っちゃってくれないかな？」
498: シリア「親の仇。……そして、そのマリスを召喚するきっかけを作ったとされるのが……セレス」
499: セレス「え？」
500: シリア「お前の父、アルタだ……」
501: セレス「あたしのお父さんが……？ どうして？」
502: シリア「流石にそこまでは知らないよ。ただ……」
503: レイア「アルタは様々な時代で足跡を残している。その記録に残る初めてがマリス召喚の時だっ
504: たということ」
505: セレス「あたしのお父さんって一体……」
506:

507: SE：デュレ、セレスを押し退け！
508:
509: デュレ「そんなことはどーだっていいです。むしろ、親の仇って何ですか？」
510: シリア「言葉の通りに受け取ってもらって構わない。そのまま、親の仇だよ。十二の精霊核伝承
511: の最後の部分、久須那が時の天使長を倒したという記述があると思うが……？」
512: デュレ「はい」
513: シリア「あの天使長がマリスの父親さ」
514: セレス「でもお、ちょっと待ってよ？ あたしたちが久須那の封印を解くのと、そのマリスって
515: ヤツが出てくると、何の関係があるワケ？ だって、マリスってのも氷に封印されてい
516: るって今、リボンちゃんも言ったよね？」
517: シリア「ああ、言ったね？」
518: セレス「じゃあ、別にマリスのことなんかどうでもいいんじゃない？」
519: シリア「どうでもよかったら、わざわざ、説明なんてしないよ」
520: デュレ「つまり、久須那の封印を解こうとするのはマリスの氷の封印を解くことにもつなぐ
521: ているということですか？」
522: シリア「直接ではないが、間接的にはつながっているんだろうな」
523: セレス「いやいや、ちょっと、マリスが復活して、仇討ちに巻き込まれたら散々なんだけど」
524: デュレ「では、その黒翼の災厄を呼ぶ天使・マリスは親の仇・久須那を恨んでいて、久須那さん
525: の封印が解かれようすると、邪魔立てをしたり、もし、マリス自身の封印が解けたら、
526: 久須那さんに対して復讐を果たすつもりなのでしょうか？」
527: シリア「そう単純でもない」
528: デュレ「単純ではない？」
529: シリア「マリスと久須那は親友だった。いや、“オレたち”はと言うべきか。親の敵だとか、復讐
530: だとかそんなことは超越して、——マリスだって判っていたさ。あいつは……そう、それ
531: こそ敵に回したくないくらい頭の切れるやつだった。——あの日が訪れるまでオレたちは
532: 心底解り合っていたよ」
533: デュレ「あの日……？」
534: シェラ「……ゼフィを永遠に奪われたその日までですね——」
535: シリア「だが、ホントにその日まであいつはオレたちの良き理解者、友だった」
536: シェラ「その友があなたのゼフィを奪い、久須那に呪いをかけたのですけどね……」
537: シリア「それは言うなっ！」
538: デュレ「呪い……？」
539: シェラ「徐々に命を奪う進行性の呪いです。そして、マリスとは世界を変えられると信じ、行動
540: した天使」
541: デュレ「世界を変えるとはどういうことですか……？」
542: シリア「天使たちの住む世界とオレたちの世界をひとつに重ね合わせること」
543: セレス「ひとつに重なるとなんかいいことでもあるの？」
544: シリア「さあなあ……。あの頃は俺もガキだったから、本当の目的までは判らなかつた。しかし、
545: 少なくともマリスは天使の世界とここを自由に行き来できたらいいと願っていたんだよ」
546: デュレ「けど、それだけなら別に——」
547: シリア「何もなかったのかもな」
548: セレス「けど、それだけじゃなかつた？」
549: シリア「そう、それだけじゃなかつた。精霊核に秘められた力を使って世界と」
550: (デュレ、遮る)
551: デュレ「精霊核に秘めた力を使う……って、十二の精霊核の伝承と一緒に……。精霊核が秘めた力
552: を開放したら、リテールが吹き飛んでしまう……」

553: シリア「そういうことだ。だから、確かに世界は変わっただろうさ。二つの世界が一つに重なる、
554: 行き来できるというよりも崩壊、と言う方向でね。だから、マリスのやるうとすることに
555: 久須那が猛反発していたことだけはよく覚えている」
556: シェラ「……そして、マリスは久須那に呪いをかけました。その進行をくい止めるためにわたし
557: の祖先・シェイラルが久須那を絵に封じたのです」
558: セレス「じゃあ、マリスは水になんて封じられたの？」
559: デュレ「マリス……は——？ どうなったんですか？」
560: シリア「マリスは……混乱に乗じて氷に封じた。しかし、マリスの封印はもうすぐ解ける。お前
561: がマリスの名を知ったということは、つまり、そういうことなのさ」
562: デュレ「……しかし、わたしたちはシェイラル一族の末裔を捜せと言われただけで……」
563: シリア「誰が言ったのかしらないが、えらくぼかした言い方だな。捜したあとのことまでは聞いて
564: いなかったというワケだ」
565: デュレ「ええ……、そういうことになるのでしょうか……？」
566: シリア「じゃあ、その続きだ。オレたちは久須那の封印を解き、おそらく、その前後でマリスと
567: 一戦やらかすことになる。何故なら、マリスが望むことに久須那とオレたちは障害になる
568: からだ」
569: デュレ「でも、わたしたちは戦いに来たわけじゃない……。ただ、十二の精霊核の真実を知りたく
570: て……ここに来ただけのはずなのに……」
571: シリア「そうか？ なら、これから体験することが伝説の続きだ」
572: デュレ「伝説の続き……？ でも、きっと、久須那さんを目覚めさせなければ、何も起きない。
573: なのにどうして、あなたたちは久須那さんを目覚めさせようと躍起になるんですか？ 絶
574: 対にそのまま、ずっとそうとしておいた方が」
575: シリア「昔、共に戦った仲間だから、どれだけの年月が流れてもオレは久須那を取り戻したい」
576: デュレ「それだけ、ですか？」
577: シリア「——お前もセレスが囚われの身になったら同じことをするだろう？」
578: デュレ「ですが、久須那さんをそっとしておけば、マリスも目覚めない？」
579: シリア「もう、手遅れだよ。運命の歯車は回り出した」
580: デュレ「——どうしても、封印破壊をしなければならぬ？」
581: シェラ「レイア、あれを持ってきてくれるかしら？」
582: レイア「はい」
583: シェラ「……あなたに渡したいものがあるのです」
584:
585: SE：ペンダントのきらきら
586:
587: シェラ「……いつか、これを託せる者が現れるだろうと思っていました。シリアがそこまで心を
588: 開いたあなたなら、きっと使いこなせます」
589: デュレ「これはアミュレット……ですか？」
590: シェラ「闇の封印破壊を使うなら必ず必要になるはずです。使い方は……自ずと判るでしょう」
591:
592:
593: //エンディング。
594: その後。
595:
596: SE：足音
597: SE：水滴の音？
598:

599: レイヴン「マリス……。長かったな、だが、これからはお前の時代だ。お前の瞳が開かれる時
600: ……、始まる……」
601: マリス「ああ……、始めよう……」